

# 護持院原の敵討

森鷗外

青空文庫



播磨国 飾東郡 姫路の城主酒井 雅楽頭忠実の 上邸は、江戸城の大手向左角にあつた。その金部屋には、いつも侍が二人ずつ泊ることになつてゐた。然るに天保四年癸巳の歳十二月二十六日の卯の刻過の事である。当年五十五歳になる、大金奉行山本三右衛門と云う老人が、唯一人すわつてゐる。ゆうべ一しよに泊る筈の小金奉行が病氣引をしたので、寂しい夜寒を一人で凌いだのである。傍には骨の太い、がっしりした行燈がある。燈心に花が咲いて薄暗くなつた、橙黄色の火が、黎明の窓の明りと、等分に部屋を領している。夜具はもう夜具葛籠にしまつてある。

障子の外に人のけはいがした。「申し。お宅から急用のお手紙が参りました」

「お前は誰だい」

「お表の小使でございます」

三右衛門は内から障子をあけた。手紙を持つて来たのは、名は知らぬが、見識つた顔の小使で、二十になるかならぬの若者である。

受け取つた封書を持つて、行燈の前にすわつた三右衛門は、先ず燈心の花を落して掻き立てた。そして懐から鼻紙袋を出して、その中の眼鏡を取つて懸けた。さて上書を改めた

が、せがれ倅宇平の手でもなければ、にようぼう女房の手でもない。ちよいと首を傾けたが、宛名には相違がないので、とにかく封を切った。手紙を引き出してひら披き掛けて、三右衛門は驚いた。中は白紙である。

はつと思つたとたんに、頭を強く打たれた。又驚く間もなく、白紙の上に血がたらたらと落ちた。背後うしろから一刀浴せられたのである。

夜具葛籠の前に置いてあつた脇わきざし差を、手探りに取ろうとする所へ、もう二の太刀たちを打ち卸して来る。無意識に右の手を挙げて受ける。手首がぼったり切り落された。起ち上がつて、左の手でむなぐらにつか掴み着いた。

相手は存外卑ひきょう怯やつな奴であつた。むなぐらを振り放し科しなに、持っていた白刃しらばを三右衛門に投げ付けて、廊下へ逃げ出した。

三右衛門は思慮いしよの違ちがもなく跡を追つた。中の口まで出たが、もう相手の行方ゆくえが知れない。痛手を負つた老人の足は、壮年の癖者くせものに及ばなかつたのである。

三右衛門は灼やけるような痛いたみを頭と手に覚えて、眩暈めまいが萌きざして来た。それでも自分で自分を励まして、金部屋かねべやへ引き返して、何より先に金箱の錠前を改めた。なんの異状もない。「先ず好かつた」と思つた時、眩暈が強く起こつたので、左の手で夜具葛籠を引き寄せて、

それに寄り掛かった。そして深い緩い息を衝いていた。

物音を聞き附けて、最初に駆け附けたのは、泊番の徒目附であった。次いで目附が来る。大目附が来る。本締が来る。医師を呼びに遣る。三右衛門の妻子のいる蠣殻町の中邸へ使が走つて行く。

三右衛門は精神が慥で、役人等に問われて、はつきりした返事をした。自分には意趣遣恨を受ける覚は無い。白紙の手紙を持って来て切つて掛かった男は、顔を知つて名を知らぬ表小使である。多分金銀に望を繫けたものであろう。家督相続の事を宜しく頼む。敵を討つてくれるように、俵に言つて貰いたいと云うのである。その間三右衛門は「残念だ、残念だ」と度々繰り返して云つた。

現場に落ちていた刀は、二三日前作事の方に勤めていた五瀬某が、詰所に掛けて置いたのを盗まれた品であつた。門番を調べてみれば、卯刻過に表小使亀蔵と云うものが、急用のお使だと云つて通用門を出たと云うことである。亀蔵は神田久右衛門町代地の仲間口入宿富士屋治三郎が入れた男で、二十歳になる。下請宿は若狭屋亀吉である。表小使亀蔵が部屋を改めて見れば、山本の外四人の金部屋役人に、それぞれ宛てた封書が

あつて、中は皆白紙である。

察するに亀蔵は、早晚泊番の中の誰かを殺して金を盗もうと、兼て謀つていたのである。奥羽その外の凶歉のために、江戸は物価の騰貴した年なので、心得違のものが出来たのであると云うことになった。天保四年は小売米百文に五合五勺になった。天明以後の飢饉年である。

医師が来て、三右衛門に手当をした。

親族が駆け附けた。蠣殻町の中邸から来たのは、三右衛門の女房と、倅宇平とである。

宇平は十九歳になっている。宇平の姉りよは細川長門守興建の奥に勤めていたので、

豊島町の細川邸から来た。当年二十二歳である。三右衛門の女房は後添で、りよと宇

平とのためには継母である。この外にまだ三右衛門の妹で、小倉新田の城主小笠原備

後守貞謙の家来原田某の妻になって、麻布日が窪の小笠原邸にしているがあるが、それは

間に合わないで、酒井邸には来なかつた。

三右衛門は医師が余り物を言わぬが好いと云うのに構わず、女房子供にも、役人に言つたと同じ事を繰り返して言つて聞せた。

蠣殻町の住いは手狭で、介抱が行き届くまいと言うので、浜町添邸の神戸某方で、

三右衛門を引き取るように沙汰せられた。これは山本家の遠い親戚である。妻子はそこへ付き添って往った。そのうちに原田の女房も来た。

神戸方で三右衛門は二十七日の寅の刻に絶命した。

その日の酉の下一刻に、上邸から見分に来た。徒目附、小人目附等に、手附が附いて来たのである。見分の役人は三右衛門の女房、伴宇平、娘りよの口書を取った。

役人の復命に依つて、酒井家から沙汰があつた。三右衛門が重手を負いながら、癖者を中の口まで追つて出たのは、「平生の心得方宜に附、格式相当の葬儀可取」と云うのである。三右衛門の創を受けた現場にあつた、癖者の刀は、役人の手で元の持主五瀬某に見せられた。

二十八日に三右衛門の遺骸は、山本家の菩提所浅草堂前の遍立寺に葬られた。葬を出す前に、神戸方で三右衛門が遭難当時に持つていた物の始末をした時、大小も当然伴宇平が持つて帰る筈であつたが、娘りよは切に請うて脇差を譲り受けた。そして宇平がそれを承諾すると、泣き腫らしていた、りよの目が、刹那の間喜にかがやいた。

侍が親を殺害せられた場合には、敵討をしなくてはならない。ましてや三右衛門が遺族に取つては、その敵討が故人の遺言になつてゐる。そこで親族打ち寄つて、度々評議を凝らした末、翌天保五年甲午の歳の正月中旬に、表向敵討の願をした。

評議の席で一番熱心に復讐がしたいと言ひ續けて、成功を急いで気を苛つたのは宇平であつた。色の蒼い、瘡せた、骨細の若者ではあるが、病身ではない。姉のりよは始終黙つて人の話を聞いていたが、願書に自分の名を書き入れて貰うことだけは、きつと居直つて要求した。りよは十人並の容貌で、筋肉の引き締まつた小女である。未亡人は頭痛持でこんな席へは稀にしか出て来ぬが、出て来ると、若し返討などに逢いはすまいかと云う心配ばかりして、果はどうしてこんな災難に遇つたことかと繰り返してくどくのであつた。日が窪から来る原田夫婦や、未亡人の実弟桜井須磨右衛門は、いつもそれを慰めようとして骨を折つた。

然るにここに親戚一同がひどく頼みに思つてゐる男が一人いる。この男は本国姫路にゐるので、こう云う席には列することが出来なかつたが、訃音に接するや否や、弔慰の状をよくよこして、敵討にはきつと助太刀をすると誓つたのである。姫路ではこの男は家老本多意氣揚に仕えている。名は山本九郎右衛門と云つて当年四十五歳になる。亡くなつた三右衛

門がためには、九つ違の実弟である。

九郎右衛門は兄の訃音を得た時、すぐに主人意気揚に願書を出した。甥、女姪が敵討をするから、自分は留守を伴健蔵に委せて置いて、助太刀に出たいと云うのである。主人本多意気揚は徳川家康が酒井家に附けた意気揚の子孫で、武士道に心入の深い人なので、すぐに九郎右衛門の願を聞き届けた。江戸ではまだ敵討の願を出したばかりで、上からそんな沙汰もないうちに、九郎右衛門は意気揚から拵附の刀一腰と、手当金二十兩とを貰つて、姫路を立つた。それが正月二十三日の事である。

二月五日に九郎右衛門は江戸蠣殻町の中邸にある山本宇平が宅に着いた。宇平を始め、細川家から暇を取つて歸つていた姉のりよが喜は譬えようがない。沈着で口数をきかぬ、筋骨逞しい叔父を見たばかりで、姉も弟も安堵の思をしたのである。

「まだこつちではお許は出んかい」と、九郎右衛門は宇平に問うた。

「はい。まだなんの御沙汰もございません。お役人方に伺いましたが、多分忌中だから御沙汰がないのらうと申すことで」

九郎右衛門は眉間に皺を寄せた。暫くして、「大きい車は廻りが遅いのう」と云つた。それから九郎右衛門は、旅の支度が出来たかと問うた。いずれお許が出てからと、宇平

が云つた。叔父の眉間には又皺が寄つた。しかし今度は長い間なんとも言わなかつた。外の話の色々した後で、叔父は思い出したように云つた。「あの支度はそのう、先へして置いても好いぞよ」

六日には九郎右衛門が兄の墓参をした。七日には浜町の神戸方へ、兄が末期に世話になつた礼に往つた。西北の風の強い日で、丁度九郎右衛門が神戸の家にいるうちに、神田から火事が始まつた。歴史に残っている午年の大火である。未の刻に佐久間町二丁目の琴三味線師の家から出火して、日本橋方面へ焼けひろがり、翌朝卯の刻まで焼けた。「八つ時分三味線屋からことを出し火の手がちりてとんだ大火事」と云う落首があつた。浜町も蠣殻町も風かざした下で、火の手は三つに分かれて焼けて来るのを見て、神戸の内は人出も多いからと云つて、九郎右衛門は蠣殻町へ飛んで帰つた。

山本の内では九郎右衛門が指図をして、荷物は残らず出させたが、申まをの下刻には中邸一面が火になつて、山本も焼けた。

りよは火事が始まるとすぐ、旧主人の細川家の邸をさして駆けて行つたが、もう豊島町は火になつていた。「あぶないあぶない」「姉さん火の中へ逃げちやあいけねえ」などと云うものがある。とうとう避難者や弥次馬共やじうまの間に挟はさまれて、身動みうごきもならぬようになる。

頭の上へは火の子がばらばら落ちて来る。りよは涙ぐんで亀井町の手前から引き返してしまつた。内へはもう叔父が浜町から帰つて、荷物を片付けていた。

浜町も矢の倉に近い方は大部分焼けたが、幸に酒井家の添邸は焼け残つた。神戸家へ重さねがさね々々世話になるのは気の毒だと云うので、宇平一家はやはり遠い親戚に当る、添邸の山本平作方へ、八日の辰の刻過に避難した。

三右衛門が遺族は山本平作方の部屋を借りて、夢の中で夢を見るような心持になつて、ぼんやりしている。未亡人は頭痛が起つて寝たきりである。宇平は腕組をして何やら考え込む。只りよ一人平作の家族に気兼ねをしながら、甲斐々々しく立ち働いていたが、午頃になつて細川の奥方の立退所が知れたので、すぐに見舞に往つた。

晩にりよが帰ると九郎右衛門が云つた。「おい。もう当分我々は家なんぞはいらんが、若殿が旅に出て風を引かぬように、支度だけはして遣らんではならんぞ」叔父は宇平を若殿々々と呼んで揶揄つていたのである。

「はい」と云つたりよは、その晩から宇平の衣類に手を着けた。

九日にはりよが旅支度にいる物を買ひに出た。九郎右衛門が書附にして渡したのである。

きようは風が南に変わつて、珍らしく暖いと思つていると、西の上刻に又檜物町から出火した。おとつい焼け残つた町家が、又この火事で焼けた。

十日には又寒い西北の風が強くと吹いていると、正午に大名小路の松平伯耆守宗発の上邸から出火して、京橋方面から芝口へ掛けて焼けた。

続いて十一日にも十二日にも火事がある。物価の高いのに、災難が引き続いてあるので、江戸中人心胸々々としてゐる。山本方で商人に注文した、少しばかりの品物にも、思い掛けぬ手違が出来て、りよが幾ら氣を揉んでも、支度がなかなかはかどらない。

或る日九郎右衛門は烟草を飲みながら、りよの裁縫するのを見ていたが、不審らしい顔をして、烟管を下に置いた。「なんだい。そんなちつぽけな物を拵えたつて、しようがないじゃないか。若殿はのつぽでお出になるからなあ」

りよは顔を赤くした。「あの、これはわたくしので」縫つてゐるのは女の脚絆甲掛である。

「なんだと」叔父は目を大きく睜つた。「お前も武者修業に出るのかい」

「はい」と云つたが、りよは縫物の手を停めない。

「ふん」と云つて、叔父は良久しく女姪の顔を見ていた。そしてこう云つた。「そいつは

駄目だ。お前のような可哀らしい女の子を連れて、どこまで往くか分からん旅が出来るものか。敵にはどこで出逢うか、何年立つて出逢うか、まるで当がないのだ。己と宇平とは只それを捜しに行くのだ。見附かつてからお前に知らせれば好いじゃないか」

「仰やる通、どこでお逢になるか知れませんが、きつと江戸へお知らせになることが出来ましようか。それに江戸から参るのを、きつとお待になることが出来ましようか」罪のないような、狡猾らしいような、くりくりした目で、微笑を帯びて、叔父の顔をじつと見た。

叔父は少からず狼狽した。「なる程。それは時と場合とに依る事で、わしもきつとは云い兼ねる。出来る事なら、どうにでもしてお前をその場へ呼んで遣るのだ。万一間に合わぬ事があつたら、それはお前が女に生れた不肖だと、諦めてくれるより外ない」

「それ御覽遊ばせ。わたくしはどうしてもその万一の事のないようにいたしとうございませ。女は連れて行かれぬと仰やるなら、わたくしは尼になつて参ります」

「まあ、そう云うな。尼も女じゃからのう」

りよは涙を縫物の上に落して、黙っている。叔父は一面詞を尽して慰めたが、一面女は連れて行かぬと、きつぱり言い渡した。りよは涙を拭いて、縫いさした脚絆をそつと側に

あつた風呂敷包ふうろしきづつみの中にしまつた。

酒井忠実は月番老中大久保かがのかみたださね加賀守忠貞と三奉行とに届とどけずみ濟の上で、二月二十六日附を以て、宇平、りよ、九郎右衛門の三人に宛てた、大目附連署の証文を渡して、敵討を許した。「早々本意を達し可立たちかへるべし帰、若又敵人死しにきふら候はば、慥たしかなる証拠を以可申立」と云う沙汰である。三人には手当が出る。留守へは扶持ふちが下がる。りよはお許は出ても、敵を捜しには旅立たぬことになつて見れば、これで未亡人とりよとの、江戸での居い所どころさえ極めて置けば、九郎右衛門、宇平の二人は出立することが出来るのである。りよは小笠原邸の原田夫婦が一先ひとます引き取ることになつた。病身な未亡人は願ねがはずみ濟の上で、里方桜井須磨右衛門の家で保養することになつた。さていよいよ九郎右衛門、宇平の二人が門出かどでをしようとしたが、二人共敵の顔を識らな。人相書だけをたよりにするのは、いかにも心細いので、口入宿の富士屋や、請宿うけやどの若狭屋へ往つて、色々問ただい質したが、これと云う事実も聞き出されぬ。それに容貌が分からぬばかりでなく、生国も紀州だとは云つてゐるが、確しかとしたことは分からぬらしい。只酒井家に奉公する前には、上州高崎にいたことがあると云うだけである。

その時、山本平作方へ突然尋ねて来た男がある。この男は近江国浅井郡の産で、少い時に江戸に出て、諸家に仲間奉公をしているうちに、丁度亀蔵と一しよに酒井家の表小使をして、三右衛門には世話になったこともあるので、若しお役に立つようなら、幸今は酒井家から暇を取っているから、敵の見識人として附いて行っても好いと云うのである。名は文吉と云って、四十二歳になる。体は丈夫で、渡者の仲間には珍らしい、実直なものだと云うことが、一目見て分かった。

九郎右衛門が会って話をして見て、すぐに宇平の家来に召し抱えることにした。

九郎右衛門、宇平、文吉の三人は二十九日に菩提所遍立寺から出立することに極めて、前日に浜町の山本平作方を引き払って、寺へ往った。そこへは病気のまだ好くならぬ未亡人の外、りよを始、親戚一同が集まって来て、先ず墓参をして、それから離別の盃を酌み交した。住持はその席へ蕎麦を出して、「これは手討のらん切でございます」と、茶番めいた口上を言った。親戚は笑い興じて、只一人打ち萎れているりよを促し立てて帰った。寺に一夜寝て、二十九日の朝三人は旅に立った。文吉は荷物を負って一步跡を附いて行く。亀蔵が奉公前にいたと云うのをたよりにして、最初上野国高崎をさして往くので

ある。

九郎右衛門も宇平も文吉も、高崎をさして往くのに、亀蔵が高崎にいそうだと云う気にはなっていない。どこをさして往こうと云う見当が附かぬので、先ず高崎へでも往つて見ようと思うに過ぎない。亀蔵と云う、無頼漢とも云えば云われる、住所不定の男のありかを、日本国中で捜そうとするのは、米倉の中の米粒一つを捜すようなものである。どの俵に手を着けて好いか分からない。然しそれ程の覚束ない事が、一方から見れば、是非共為遂げなくてはならぬ事である。そこで一行は先ず高崎と云う俵をほどいて見ることにした。

高崎では踪跡が知れぬので、前橋へ出た。ここには榎町の政淳寺に山本家の先祖の墓がある。九郎右衛門等はそれに参つて成功を祈つた。そこから藤岡に出て、五六日いた。そこから武蔵国の境を越して、児玉村に三日いた。三峯山に登つては、三峯権現に祈願を籠めた。八王子を経て、甲斐国に入つて、郡内、甲府を二日に廻つて、身延山へ参詣した。信濃国では、上諏訪から和田峠を越えて、上田の善光寺に参つた。越後国では、高田を三日、今町を二日、柏崎、長岡を一日、三条、新潟を四日で廻つた。そこから加賀街道に転じて、越中国に入つて、富山に三日いた。この辺は凶

年の影響を蒙ることが甚しくて、一行は麦に芋大根を切り交ぜた飯を食つて、農家の土間に筵を敷いて寝た。飛騨国では高山に二日、美濃国では金山に一日いて、木曾路を経て伊勢国に入り、桑名、四日市、津を廻り、松坂に三日いた。

一行が二日以上泊るのは、稀に一日の草臥休をすることもあるが、大抵何か手掛りがありそうに思われるので、特別搜索をするのである。松坂では殿町に目代岩橋某と云うものが出て、九郎右衛門等の言うことを親切に聞き取つて、綿密な調べをしてくれた。その調べ上げた事実を言つて聞せられた時は、一行は暗中に燈火を認めたような気がしたのである。

松坂に深野屋佐兵衛と云う大商人がある。そこへは紀伊国熊野浦長島外町の漁師定右衛門と云うものが毎日魚を送つてよこす。その縁で佐兵衛は定右衛門一家と心安くなつてゐる。然るに定右衛門の長男亀蔵は若い時江戸へ出て、音信不通になつたので、二男定助一人をたよりにしている。その亀蔵が今年正月二十一日に、襦袢を身に纏つて深野屋へ尋ねて来た。佐兵衛は「お前のような不孝者を、親父様に知らせずに留めて置く事

は出来ぬ」と云った。亀蔵はさすがに深野屋の店を立ち去ったが、それを見たものが、「あれは紀州の亀蔵と云う男で、なんでも江戸で悪い事をして、逃げて来たのだろう」と評判した。

後に深野屋へ聞えた所に依ると、亀蔵は正月二十四日に、熊野仁郷村にんごうむらにいるははかたの小父林助の家に来て、置いてくれと頼んだが、林助は貧乏していて、人を置くことが出来ぬと云って、勧めて父定右衛門が許もとへ遣やった。知人にたよろうとし、それが慍かなわぬ段になつて、始めて親戚をおとずれ、親戚にことわられて、亀蔵はようよう親許へ帰る気になつたらしい。定右衛門の家には二十八日に帰った。

二月中旬に亀蔵は江戸で悪い事をして帰つたのだからと云う噂うわさが、松坂から定右衛門の方へ聞えた。定右衛門が何をしたかと問うた時、亀蔵は目上の人に創を負わせたと云った。そこで定右衛門と林助とで、亀蔵を坊主にして、高野山こうやさんに登らせることにした。二人が剃髪ていはつした亀蔵を三浦坂まで送つて別れたのが二月十九日の事である。亀蔵はその時茶の弁慶べんけい縞じまの木綿綿入を着て、木綿帯を締め、藍あゐの股引ももひきを穿はいて、脚絆を当てていた。懐中には一両持つていた。

亀蔵は二十二日に高野領清水村の又兵衛と云うものの家に泊つて、翌二十三日も雨が降

つたので滞留した。そして二十四日に高野山に登った。山で逢ったものもある。二十六日の夕方には、下山して橋本にいたのを人が見た。それから行方不明になっている。多分四国へでも渡ったかと云うことである。

松坂の目代にこの顛末てんまつを聞いた時、この坊主になった定右衛門の伴亀蔵が敵だと云うことに疑を挟はさむものは、主従三人の中うちに一人もなかった。宇平はすぐに四国へ尋ねに往こうと云った。しかし九郎右衛門がそれを止めて、四国へ渡ったかも知れぬと云うのは、根拠のない推量である、四国へもいずれ往くとして、先ず手近な土地から捜すが好いと云った。

一行は松坂を立つて、武運を祈るために参宮した。それから関を経て、東海道を摂津せつづ国大阪に出て、ここに二十三日を費した。その間に松坂から便たよりがあつて、紀州の定右衛門が伴の行末を心配して、気病きやまひで亡くなつたと云う事を聞いた。それから西宮にしのみや、兵庫ひょうごを経て、播磨国はりまのくにに入り、明石あかしから本国姫路に出て、魚町うおまちの旅館に三日いた。九郎右衛門は伴の家があつても、本意を遂げるまでは立ち寄らぬのである。それから備前国びぜんのくにに入り、岡山を経て、下山しもやまから六月十六日の夜舟に乗つて、いよいよ四国へ渡った。松

坂以来九郎右衛門の搜索方ほうしん鍼はりに對して、稍やや不な満まんらしい気色を見せながら、つまりは意志の堅固な、機嫌に浮うきしずみ沈しずみのない叔父に威圧せられて、附いて歩いていた宇平が、この時急に活気を生じて、船中で夜の更ふけるまで話し続けた。

十六日の朝舟は讚岐国丸亀さぬきのくにまるがめに着いた。文吉に松尾を尋ねさせて置いて、二人は象頭山ざうずへ祈願に登った。すると参籠人さんろうにんが丸亀で一癖ありげな、他所たしよもの者の若い僧を見たと言いう話をした。宇平はもう敵を見附けたような氣になつて、亥いの刻に山を下つた。丸亀に歸つて、文吉を松尾から呼んで僧を見させたが、それは別人であつた。

伊予国いよのくにの銅山は諸国の悪者の集まる所だと聞いて、一行は銅山を二日搜した。それから西条に二日、小春こはる、今治いまばりに二日いて、松山から道後の温泉に出た。ここへ来るまでに暑あつさを侵して旅行をした宇平は留飲りゅういん疝せん通つうに悩み、文吉も下痢なかおすして、食事が進まぬので、湯町で五十日の間保養した。大分体が好くなつたと云つて、中大洲なかおおすを二日搜して、八幡浜やわたに出ると、病後を押して歩いた宇平が、力揚げがして煩わづらつた。そこで五日間滞留して、ようよう九州行の舟に乗ることが出来た。四国の旅は空むなしく過ぎたのである。

舟は豊後国ぶんごのくに佐賀関さがのせきに着いた。鶴崎つるさきを経て、肥後国ひごのくにに入り、阿蘇山あそさんの阿蘇神宮、

熊本の清せい正しょう公こうへ祈願に参つて、熊本と高橋とを三日ずつ捜して、舟で肥ひ前ぜん国のくに島原に渡つた。そこに二日いて、長崎へ出た。長崎で三日目に、敵らしい僧を島原で見たと云う話を聞いて、引き返して又島原を五日尋ねた。それから熊本を更に三日、宇土を二日、八や代つしろを一日、南なん工く宿じゆくを二日尋ねて、再び舟で肥前国温泉おんせん嶽だけの下の港へ渡つた。すると長崎から来た人の話に、敵らしい僧の長崎にいることを聞いた。長崎上かみちくご筑ちく後ご町まちのいっこう一向しゆく宗しゆの寺に、勧善寺と云うのがある。そこへ二十歳前後の若い僧が来て、棒を指南していると云うのである。一行は又長崎行の舟に乗つた。

長崎に着いたのは十一月八日の朝である。舟引地ふなひきじ町まちの紙屋と云う家に泊つて、町年まちどし寄より福田某たずねにんに尋たずね人の事を頼んだ。ここで聞けば、勧善寺の客僧はいよいよ敵らしく思われる。それは紀州産うまれのもので、何か人目を憚はばるかわけがあると云つて、門外不出で暮していと云うのである。親切な町年寄は、若し取り逃がしてはならぬと云つて、盗賊方にん二人を同行させることにした。町で剣術師範をしている小川某と云うものも、町年寄の話聞いて、是非その場に立ち会つて、場合に依つては助太刀がしたいと申し込んだ。

九郎右衛門、宇平の二人は、大村家の侍で棒の修行を懇望こんもうするものだと云つて、勧善寺に弟子入の事を言い入れた。客僧は承引して、あすの巳みの刻に面会しようと言つた。二

人は喜び勇んで、文吉を連れて寺へ往く。小川と盜賊方の二人とは跡に続く。さて文吉に合図を教えて客僧に面会して見ると、似も寄らぬ人であった。ようようその場を取り繕つて寺を出たが、皆忌々しがる中に、宇平は殊に落胆した。

一行は福田、小川等に礼を言つて長崎を立つて、大村に五日いて佐賀へ出た。この時九郎右衛門が足痛を起して、杖を衝いて歩くようになった。筑後国では久留米を五日尋ねた。筑前国では先ず大宰府天満宮に参詣して祈願を籠め、博多、福岡に二日いて、豊前国小倉から舟に乗つて九州を離れた。

長門国下関に舟で渡つたのが十二月六日であつた。雪は降つて来る。九郎右衛門の足痛は次第に重るばかりである。とうとう宇平と文吉とで勧めて、九郎右衛門を一且姫路へ帰すことにした。九郎右衛門は渋りながら下関から舟に乗つて、十二月十二日の朝播磨国室津に着いた。そしてその日のうちに姫路の城下平の町の稲田屋に這入った。本意を遂げるまでは、飽くまでも旅中の心得でいて、倅の宅には帰らぬのである。

宇平は九郎右衛門を送つて置いて、十二月十日に文吉を連れて下関を立つた。それから周防国宮市に二日いて、室積を経て、岩国の錦帯橋へ出た。そこを三日搜して、舟で

安芸国宮島へ渡つた。広島に八日いて、備後国に入り、尾の道、鞆に十七日、福山に二日いた。それから備前岡山を経て、九郎右衛門の見舞旁姫路に立ち寄つた。

宇平、文吉が姫路の稲田屋で九郎右衛門と再会したのは、天保六年乙未の歳正月二十日であつた。丁度その時広岸（広峯）山の神主谷口某と云うものが、怪しい非人の事を知らせてくれたので、九郎右衛門が文吉を見せに遣つた。非人は石見産だと云つていた。人に怪まれるのは脇差を持つていたからであつた。しかし敵ではなかつた。

九郎右衛門の足はまだなかなか直らぬので、宇平は二月二日に文吉を連れて姫路を立つて、五日に大阪に着いた。宿は阿波座おくひ町の撰津国屋である。然るに九郎右衛門は二人を立たせてから間もなく、足が好くなつて、十四日には姫路を立つて、明石から舟に乗つて、大阪へ追いかけて往つた。

三人は撰津国屋に泊つて、所々を尋ね廻るうちに、路銀が尽きそうになつた。そこで宿屋の主人の世話で、九郎右衛門は按摩になり、文吉は淡島の神主になつた。按摩になつたのは、柔術の心得があるから、按摩の出来ぬ筈はないと云うのであつた。淡島の神主と云うのは、神社で神に仕えるものではない。胸に小さい宮を懸けて、それに紅で縫つた括

くりにげる  
猿などを吊り下げ、手に鈴を振つて歩く乞食である。

その時九郎右衛門、宇平の二人は文吉に暇を遣らうとして、こう云つた。これまでも我々は只お前と寝食を共にすると云うだけで、給料と云うものも遣らず、名のみ家来にしていたのに、お前は好く辛抱して勤めてくれた。しかしもう日本全国をあらかた遍歴して見たが、敵はなかなか見附からない。この按排では我々が本意を遂げるのは、いつの事か分らない。事によつたらこのまま恨を呑んで道路にのたれ死をするかも知れない。お前はこれまで詞で述べられぬ程の親切を尽してくれたのだから、どうもこの上一しよにいてくれとは云い兼ねる。勿論敵の面目を見識らぬ我々は、お前に別れては困るに違ないが、もはや是非に及ばない。只運を天に任せて、名告り合う日を待つより外はない。お前は忠実この上もない人であるから、これから主取をしたら、どんな立身も出来よう。どうぞここで別れてくれと云うのであつた。

九郎右衛門は兼て宇平に相談して置いて、文吉を呼んでこの申渡をした。宇平は側で腕組をして聞いていたが、涙は頬を伝つて流れていた。

黙つて衝つ伏して聞いていた文吉は、詞の切れるのを待つて、頭を擡げた。睜つた目は異様に赫いている。そして一声「檀那、それは違います」と叫んだ。心は激して詞はしど

ろであつたが、文吉は大凡おおよそこんなことを言った。この度の奉公たびは当あたり前の奉公まえではない。敵討の供に立つからは、命はないものである。お二人が首尾好く本意を遂げられれば好し、万一敵に多勢の悪者でも荷担して、返かえり討うちにでも逢われれば、一しよに討たれるか、その場を逃れて、二重の仇あだを討つかの二つより外ない。足腰の立つ間は、よしやお暇が出て、影の形に添うように離れぬと云うのであつた。

さすがの九郎右衛門も詞の返しようがなかつた。宇平は蘇よみがえつた思おもいをした。

それからは三人が摂津国屋を出て、木賃宿きちんやどに起おき臥ふしすることになつた。もうどこをさして往つて見ようと云う所もないので、只や已まむに勝まさる位の考で、神仏の加護を念じながら、日ごとに市中を徘徊はいかいしていた。

そのうち大阪に咳がいぎやく逆さかが流行して、木賃宿も咳せきをする人だらけになつた。三月の初に宇平と文吉とが感染して、熱を出して寝た。九郎右衛門は自分の貰つた錢で、三人が一口ずつでも粥かゆを啜すするようになつていた。四月の初に二人が本復すると、こん度は九郎右衛門が寝た。体は嚴がんじよう暈うんでも、年を取つていたので、容体ようたいが二人より悪い。人の好い医者いしやを頼んで見て貰うと、傷しょうかん寒かんだと云つた。それは熱が高いので、諛語うわごとに「こら待て」だの「逃のががすものか」だのと叫んだからである。

木賃宿の主人が迷惑がるのを、文吉が宥め賺して、病人を介抱しているうちに、病附の急劇であつたわりに、九郎右衛門の強い体は少い日数で病気に打ち勝つた。

九郎右衛門の恢復したのを、文吉は喜んだが、ここに今一つの心配が出来た。それは不断から機嫌の変わり易い宇平が、病後に際立つて精神の変調を呈して来たことである。

宇平は常はおとなしい性である。それにどこか世馴れぬぼんやりした所があるので、九郎右衛門は若殿と綽号を付けていた。しかしこの若者は柔い草葉の風に靡くように、何事にも強く感動する。そんな時には常蒼い顔に紅が潮して来て、別人のように能弁になる。それが過ぎると反動が来て、沈鬱になつて頭を低れ手を拱いて黙っている。

宇平がこの性質には、叔父も文吉も慣れていたが、今の様子はそれとも変つて来ているのである。朝夕平穏な時がなくなつて、始終興奮している。苛々したような起居振舞をする。それにいつものような発揚の状態になつて、饒舌をすることは絶えて無い。寧沈黙勝だと云つても好い。只興奮しているために、瑣細な事にも腹を立てる。又何事もないと、わざわざ人を挑んで詞尻を取つて、怒の動機を作る。さて怒が生じたところで、それをあらわに発動させずに、口小言を言つて拗ねている。

こう云う状態が二三日続いた時、文吉は九郎右衛門に言った。「若檀那わかだんなの御様子はどうも変じやございませんか」文吉は宇平の事を、いつか若檀那と云うことになっていた。九郎右衛門は気にも掛けぬらしく笑つて云つた。「若殿か。あの御機嫌の悪いのは、旨うまい物でも食わせると直るのだ」

九郎右衛門のこう云つたのも無理はない。三人は日ごとに顔を見合つていて気が附かぬが、困窮びようあと病痾びょうあと羈旅きりよとの三つの苦艱くげんを嘗め尽して、どれもこれも江戸を立つた日の倂おもかげはなくなつていたのである。

文吉がこの話をした翌日の朝であつた。相宿あいやどのものがそれぞれ稼かせぎに出た跡で、宇平は九郎右衛門の前に膝ひざを進めて、何か言い出しそうにして又黙つてしまった。

「どうしたのだい」と叔父が云つた。

「実は少し考えた事があるのです」

「なんでも好いから、そう云え」

「おじさん。あなたはいつ敵に逢えると思つていますか」

「それはお前にも分かるまいが、己おれにも分からんかう」

「そうでしょう。蜘蛛くもは網いを張つて虫の掛かるのを待つています。あれはどの虫でも好い

のだから、平気で待つているのです。若し一匹の極まった虫を取ろうとするのだと、蜘蛛の網は役に立ちますまい。わたしはこうして僂倅を当にしていつまでも待つのが厭になりました」

「随分己もお前も方々歩いて見たじやないか」

「ええ。それは歩くには歩きましたが」と云い掛けて、宇平は黙った。

「はてな。歩くには歩いたが、何が悪かったと云うのか。構わんから言え」

宇平はやはり黙つて、叔父の顔をじつと見ていたが、暫くして云つた。「おじさん。わたし共は随分歩くには歩きました。しかし歩いたつてこれは見附からないのが当前かも知れません。じつとして網を張つていたつて、来て掛かりつこはありませんが、歩いていたつて、打つ附からないかも知れません。それを先へ先へと考えてみますと、どうも妙です。わたしは変な心持がしてなりません」宇平は又膝を進めた。「おじさん。あなたは どうしてそんな平気な様子をしていられるのです」

宇平のこの詞を、叔父は非常な注意の集中を以て聞いていた。「そうか。そう思うのか。よく聴けよ。それは武運が拙くて、神にも仏にも見放されたら、お前の云う通だろう。人間はそうしたものではない。腰が起てば歩いて捜す。病気になれば寝ていて待つ。神仏

の加護があれば敵にはいつか逢われる。歩いて行き合うかも知れぬが、寝ている所へ来るかも知れぬ」

宇平の口角には微笑かな、嘲るような微笑が閃いた。「おじさん。あなたは神や仏が本当に助けてくれるものだと思いますか」

九郎右衛門は物に動ぜぬ男なのに、これを聞いた時には一種の気味悪さを感じた。「うん。それは分らん。分らんのが神仏だ」

宇平の態度は不思議に恬然としていて、いつもの興奮の状態とは違っている。「そうですね。神仏は分からねぬものです。実はわたしはもう今までのような事を罷めて、わたしの勝手にしようかと思つています」

九郎右衛門の目は大きく開いて、眉が高く拳がったが、見る見る蒼ざめた顔に血が升つて、拳が固く握られた。

「ふん。そんなら敵討は罷にするのか」

宇平は軽く微笑んだ。おこつたことのない叔父をおこらせたのに満足したらしい。「そうですね。亀蔵は憎い奴ですから、若し出合ったら、ひどい目に逢わせて遣りませぬ。だが捜すのも待つのも駄目ですから、出合うまではあいつの事なんか考えずにいます。」

わたしは晴がましい敵討をしようとは思いませんから、助太刀もいりません。敵が知れば知れる時知れるのですから、見識みしりにん人もいりません。文吉はこれからあなたの家来にしてお使下さいまし。わたしは近い内にお暇をいたす積です」

九郎右衛門が怒は発するや否や忽たちまち解けて、宇平のこの詞ことばを聞いている間に、いつもの優しいおじさんになっていた。只何事をも強しいて笑じょうだん談に取りなす癖のおじが、珍らしく生真面目きまじめになつていただけである。

宇平が席を起つて、木賃宿の縁側を降りる時、叔父は「おい、待て」と声を掛けたが、宇平の姿はもう見えなかった。しかし宇平がこれきりいなくなろうとは、叔父は思わなかった。

夕方に文吉が帰つたので、九郎右衛門は近所へ往つて宇平を尋ねて来いと云つた。宇平は折々町の若い者の象しやうぎ棋をさしている所などへ往つた。最初は敵の手掛りを聞き出そうとして、雑談に耳を傾けていたのだが、後には只何となしにそこで話していたのである。文吉はそう云う家を尋ねた。しかしどこにもいなかった。その晩には遅くなるまで九郎右衛門が起きていて、宇平の帰るのを待つたが、とうとう帰らなかつた。

文吉は宇平を尋ねて歩いた序ついでに、ふと玉造たまつくり豊空ほうくう稲荷いなりの靈驗れいげんの話はなしを聞いた。どこの誰たれの親の病気が直ったとか、どこの誰は迷子の居所を知らせて貰ったとか、若い者共が評判し合っていたのである。文吉は九郎右衛門にことわって、翌日行水して身を潔きよめて、玉造をさして出て行つた。敵のありかと宇平の行方とを伺つて見ようと思つたのである。

稲荷いなりの社やしろの前まへに来て見れば、大勢の人が出入でいりしている。数えられぬ程多く立ててある、赤い鳥居が重なり合つていて、群集はその赤い洞ほらの中で蠢うごめいているのである。外廻りには茶店が出来ている。汁粉屋がある。甘酒屋がある。赤い洞の両側には見せ物小屋やらおもちゃ店みせやらが出来ている。洞を潜くぐつて社に這入ると、神主がお初穂と云つて金を受け取つて、番号札をわたす。伺を立てる人をその番号順に呼び入れるのである。

文吉は持つていただけの錢を皆お初穂に上げた。しかし順番がなかなか来ぬので、とう日の暮れるまで待つた。何も食わずに、腹が耗へつたとも思わずにいたのである。暮六くれむつが鳴ると、神主が出て「残りの番号の方は明朝お出いでなさい」と云つた。

次の日には未明に文吉が社へ往つた。番号順は文吉より前なのに、まだ来ておらぬ人があつたので、文吉は思つたより早く呼び出された。文吉が沙すなに額うづを埋めて拝みながら待つていると、これも思つたより早く、神主が出て御託宣を取り次いだ。「初の尋たずね人にんは春

頃から東国の繁華な土地にいる。後の尋人の事は御託宣が無い」と云った。

文吉は玉造から急いで帰って、御託宣を九郎右衛門に話した。

九郎右衛門はそれを聞いて云った。「そうか。東国の繁華な土地と云えば江戸だが、いかに亀蔵が横着でも、うかと江戸には戻ってしまい。成程我々が敵討に余所へ出たと云うことは、噂に聞いたかも知れぬが、それにしても外の親戚も気を付けているのだから、どうも江戸に戻っていきそうにない。お前は神主に一杯食わされたのじゃないか。後の尋人が知れぬと云うのも、お初穂がもう一度貰いたいのかも知れん」

文吉はひどく勿体ながって、九郎右衛門の詞を遮るよう<sup>さえぎ</sup>にして、どうぞそう云わずに御託宣を信ずる気になつて貰いたいと頼んだ。

九郎右衛門は云った。「いや。己は稻荷様を疑いはせぬ。只どうも江戸ではなさそうに思ふのだ」

こう云っている所へ、木賃宿の亭主が来た。今家主の所へ呼ばれて江戸から来た手紙を貰ったら、山本様へのお手紙であつたと云つて、一封の書状を出した。九郎右衛門が手に受け取つて、「山本宇平殿、同九郎右衛門殿、桜井須磨右衛門、平安」と読んだ時、木賃宿でも主従の礼儀を守る文吉ではあるが、兼て聞き知っていた後室の里からの手紙は、

なんの用事かと気が急せいて、九郎右衛門が披ひらく手紙の上に、乗り出すようにせずにはいられなかった。

敵討の一行が立つた跡で、故人三右衛門の未亡人は、里方桜井須磨右衛門の家で持病の直るのを待った。暫くすると難儀に遭あつてから時が立つたのと、四方あたりが静になったののために、頭痛が余程軽くなつた。実弟須磨右衛門は親切にはしてくれるが、世話にばかりなつてもいにくいので、未亡人は余り忙せわしくない奉公口をと云つて捜して、とうとう小川町まないたばしぎわ 橋はし 際ぎわの高家衆大沢右京大夫基昭こうけしゆうが奥に使われることになつた。

宇平の姉りよは叔母婿原田方に引き取られてから、墓参の時などには、櫛しきみを売うる媪うばの世間話にも耳を傾けて、敵のありかを聞き出そうとしていたが、いつか忌いみも明けた。そこで所々しよしよに一二箇月ずつ奉公していたら、自然手掛りを得るたつきにもなろうと思ひ立つて、最初は本所の或る家に住み込んだ。これは遠い親戚に当るので、奉公人や客分やら分おかからぬ待遇を受けて、万事の手伝をしたのである。次に赤坂の堀と云う家の奥に、大小母おが勤めていたので、そこへ手伝に往つた。次に麻布あさぶの或る家に奉公した。次に本郷弓町の寄よ合あ衆しゆう本多帯たてわき刀の家来たてわきに、遠い親戚があるので、そこへ手伝に往つた。こんな風に奉

公先を取り替えて、天保六年の春からは御茶の水の寄合衆酒井亀之進かめのしんの奥に勤めていた。この酒井の妻は浅草の酒井石見守忠ただみち方の娘である。

未亡人もりよも敵のありかを聞き出そうと思つていて、中にもりよは昼夜それに心を砕いていたが、どうしても手掛りがない。九郎右衛門や宇平からは便たよりが絶たえだえ々になるのに、江戸でも何一つしでかした事がない。女子達おんなの心細さは言おう様がなかつた。

月日が立つて、天保六年の五月の初になつた。或る日未亡人の里方の桜井須磨右衛門が浅草の観音に参詣して、茶店に腰を掛けていると、今まで歇やんでいた雨が又一しきり降つて来た。その時茶店の軒へ駆け込んで雨を避ける二人連つれの遊あそび人体にんていの男がある。それが小降になるのを待ちながら、軒に立つてこんな話をした。

一人が云つた。「お前に話そうと思つて忘れていたが、ゆうべの事だつた。丁度今のよさかどいうに神田で雨に降り出されて、酒問屋さかどいの戸の締つている外でしゃがんでみると、そこへ駆け込んだ奴やつがある。見れば、あの酒井様にいた亀じゃあねえか。己はびっくりしたよ。好くずうずうしく帰つて来やがつたと思ひながら、おい、亀と声を掛けたのだ。すると、えと云つて振り向いたが、人ひと違ちがえをひとちがえしなさんな、おいらあ虎とらと云うもんだと云つといて、まだ雨がどしどし降っているのに、駆け出して行つてしまやがつた」

今一人が云つた。「じゃあ又帰つていやがるのだ。太え奴だなあ」

須磨右衛門は二人に声を掛けて、その亀と云う男は何者だと問うた。二人は侍に糺されるのをひどく当惑がる様子であつたが、おとどしの暮に大手の酒井様のお邸で悪い事をして逃げた仲間の亀蔵の事だと云つた。そして最後に「なに、ちよいと見たのですから、全く人違で、本当に虎と云うものだったかも知れません」と詞を濁した。只見掛けたと云うだけのこの二人を取り押さえても、別に役に立ちそうではなく、又荒立てて亀蔵に江戸を逃げられてはならぬと思つて、須磨右衛門は穩便に二人を立ち去らせた。

大阪で九郎右衛門が受け取つたのは、桜井から亀蔵の江戸にいることを知らせて遣つた手紙である。

文吉はすぐに玉造へお礼参に往つた。九郎右衛門は文吉の歸るのを待つて、手分をして大阪の出口々々を廻つて見た。宇平の行方を街道の駕籠の立場、港の船問屋に就いて尋ねたのである。しかしそれは皆徒勞であつた。

九郎右衛門は是非なく甥の事を思い棄てて、江戸へ立つ支度をした。路銀は使い果しても、用心金と衣類腰の物には手は着けない。九郎右衛門は花色木綿の単物に茶小倉の帯を締め、紺麻緋の野羽織を着て、両刀を手挟んだ。持物は鳶色ごろふくの懐

中物、鼠木綿ねずみもめんの鼻紙袋、十手早繩はやなわである。文吉も取つて置いた花色の単物に御納戸おなんど小倉の帯を締めて、十手早繩を懐中した。

木賃宿の主人には礼金を遣り、摂津国屋へは挨拶あいさつに立ち寄つて、九郎右衛門主従は六月二十八日の夜船で、伏見から津へ渡つた。三十日に大暴風おおあらしで阪の下に半日留められた外は、道中なんの障さわりもなく、二人は七月十一日の夜品川に着いた。

十二日寅とらの刻に、二人は品川の宿を出て、浅草の遍立寺へんりゆうじに往つて、草鞋わらじのまままで三右衛門の墓に参つた。それから住持に面会して、一夜旅ひとよの疲を休めた。

翌十三日は盂蘭盆会うらぼんえで、親戚のものが墓参に来る日である。九郎右衛門は住持に、自分の来たのを知らせてくれるなど口止をして、自分と文吉とは庫裡くらりに隠れていた。住持はなぜかと問うたが、九郎右衛門は只ばかりごと「謀は密なるをとうとぶと申しますからな」と云つたきり、外の話にまぎらした。墓参に来たのは原田、桜井の女房達で、厳きびしい武家奉公をしている未亡人やりよは来なかつた。

戌いぬの下刻になつた時、九郎右衛門は文吉に言った。「さあ、これから捜しに出るのだ。見附けるまでは足を摺粉木すりこぎにして歩くぞ」

遍立寺を旅支度のままで出た二人は、先ず浅草の観音をさして往った。雷門近くになった時、九郎右衛門が文吉に言った。「どうも坊主にはなっておらぬらしいが、どんな風体ふうていでも見逃がすなよ。だがどうせ立派な形なりはしていないのだ」

境けいだい内を廻つて、観音を拜んで、見識人みしりにんを桜井に逢わせて貰った礼を言った。それから蔵前くらまえを両国へ出た。きようは蒸暑いのに、花火があるので、涼すずみかた旁がた見物に出た人が押し合っている。提灯ちようちんに火を附ける頃、二人は茶店で暫く休んで、汗が少し乾くと、又歩き出した。

川も見えず、船も見えない。玉や鍵かぎやと叫ぶ時、群集うなじが項そを反らして、群集の上の花火を見る。

西とりの下刻と思われる頃であつた。文吉が背後うしろから九郎右衛門の袖を引いた。九郎右衛門は文吉の視線たどを辿つて、左手一歩前を行く背の高い男を見附けた。古びた中形ちゆうがた木綿ひとえものの単物ひとえものに、古びた花色しまはかた縞博多しまはかたの帯を締めている。

二人は黙つて跡を附けた。月の明るい夜である。横山町を曲る。塩町しおちようから大伝おおでんまち馬町ように出る。本町を横切つて、石町河岸こくちようがしから龍閑橋りゆうかんばし、鎌倉河岸かまくらがしに掛る。次第に人通が薄らぐので、九郎右衛門は手拭を出して頬ほおかぶり被かぶりをして、わざとよろめきながら歩く。

文吉はそれを扶ける振をして附いて行く。

神田橋外元護寺院二番原に來た時は丁度子の刻頃であつた。往來はもう全く絶えている。九郎右衛門が文吉に目ぐわせをした。二つの体を一つの意志で働かすように二人は背後から目ぎす男に飛び着いて、黙つて両腕をしっかりと攪んだ。

「何をしやあがる」と叫んだ男は、振り放そうと身をもがいた。

無言の二人は釘拔で釘を挟んだように腕を攪んだまま、もがく男を道傍の立木の蔭へ、引き摩つて往つた。

九郎右衛門は強烈な火を節光板で遮つたような声で云つた。「己はおとどしの暮お主に討たれた山本三右衛門の弟九郎右衛門だ。国所と名前を言つて、覚悟をせい」

「そりやあ人違だ。おいらあ泉州産で、虎蔵と云うものだ。そんな事をした覚はねえ」

文吉が顔を覗き込んだ。「おい。亀。目の下の黒痣まで知っている己がいる。そんなしらを切るな」

男は文吉の顔を見て、草葉が霜に萎れるように、がくりと首を低れた。「ああ。文公か」  
九郎右衛門はこれだけ聞いて、手早く懐中から早繩を出して、男を縛つた。そして文吉

に言った。「もうここは好いから、お茶ノ水の酒井亀之進様のお邸へ往つてくれ。口上はこうだ。手前は御当家のお奥に勤めているりよの宿やどもと許から参りました。母親が霍乱かくらんで夜明よあけまで持つまいと申すこととござります。どうぞ格別の思おぼしめし召めしでお暇を下さつて、一目お逢わせ下さるようにと、そう云うのだ。急げ」

「は」と云つて、文吉は錦町にしきちょうの方角へ駆け出した。

酒井亀之進の邸では、今宵奥こよいのひげが遅くて、りよはようよう部屋に帰つて、寝巻に着換えようとしている所であつた。そこへ老女の使が呼びに来た。

りよは着換えぬうちで好かつたと思ひながら、すぐに起つて上草履うわぞうりを穿はいて、廊下づたい伝づたいに老女の部屋へ往つた。

老女は云つた。「お前の宿から使が来ているがね、母親が急病だと云うことだ。盆ではあり、御多用の所だが、親の病氣は格別だから、帰つてお出いで。親御に逢つたら、夜でもすぐにお邸へ戻るのだよ。あすになつてから、又改めてお暇を願つて遣るから」

「難ありがと有あうござります」と、りよはお請うけをして、老女の部屋をすべり出た。

りよはこのまま往つても好いと考へながら、使とは誰が来たのかと、奥の口へ覗きに出

た。御用を勤める時の支度で、木綿中形の単物に黒縹子の帯を締めていたのである。奥の口でりよは旅支度の文吉と顔を見合せた。そして親の病気が口実だと云うことを悟った。りよと一しよに奥を下がった傍輩が二三人、物珍らしげに廊下に集まって、りよが宿の使に逢うのを見ようとしている。

「ちよいと忘物をいたしましたから」と、りよは独言のように云って、足を早めて部屋へ引き返した。

部屋の戸を内から締めたりよは、葛籠の蓋を開けた。先ず取り出したのは着換の帷子一枚である。次に臂をずつと底までさし入れて、短刀を一本取り出した。当番の夜父三右衛門が持っていた脇差である。りよは二品を手早く袱紗に包んで持って出た。

文吉は敵を掴まえた顛末を、途中でりよに話しながら、護持院原へ来た。

りよは九郎右衛門に挨拶して、着換をする余裕はないので、短刀だけを包の中から出した。

九郎右衛門は敵に言った。「そこへ来たのが三右衛門の娘りよだ。三右衛門を殺した事と、自分の国所名前をそこで言え」

敵は顔を挙げてりよを見た。そして云った。「わたしもこれまでだ。本当の事を言います。なる程山本さんに創きずを附けたのはわたしだが、殺しはしません。勝負事に負けて金に困ったものですから、どうかして金が取りたいと思つて、あんなへまな事をしました。わたしは泉州生田郡いんくたごおり上野原村の吉兵衛きちべえと云うものの伴で、名は虎蔵と云います。酒井様へ小使に住み込む時、勝負事で識しりあひ合あひになつていた紀州の亀蔵と云う奴の名を、口から出任せに言つたのです。この外に言うことはありません。どうぞ御存分になすつて下さい。」

「好く言つた」と九郎右衛門は答えた。そしてりよと文吉とに目ぐわせして虎蔵の縄を解いた。三人が三方からじりじりと詰め寄つた。

縄をほどかれて、しよんぼり立つていた虎蔵が、ひよいと物をねらう獣のように体を前まえかがみ

屈まがにしたかと思つと、突然りよに飛び掛かつて、押し倒して逃げようとした。

その時りよは一歩下がつて、柄つかを握つていた短刀で、抜打に虎蔵を切つた。右の肩尖かたさきから乳へ掛けて切り下げたのである。虎蔵はよろけた。りよは二太刀三太刀切つた。虎蔵は倒れた。

「見事じゃ。とどめは己が刺す」九郎右衛門は乗り掛かつて吭のどを刺した。

九郎右衛門は刀の血を虎蔵の袖で拭いた。そしてりよにも脇差を拭かせた。二人共目は

涙ぐんでいた。

「宇平がこの場に居合せませんのが」と、りよは只一言云った。

九郎右衛門等三人は河岸にある本多伊予守頭取の辻番所に届け出た。辻番組合月番にしまるおこなんどうどのきちのじよう西丸御小納戸鵜殿吉之丞の家来玉木勝三郎組合の辻番人が聞き取った。本多から大目附に届けた。辻番所組合遠藤但馬守胤統から酒井忠学の留守居へ知らせた。酒井家は今年四月に代替がしているのである。

酒井家から役人が来て、三人の口書を取つて忠学に復命した。

翌十四日の朝は護持院原一ぱいの見物人である。敵を討った三人の周囲へは、山本家の親戚が追々馳せ附けた。三人に鵜殿家から鮎と生菓子とを贈った。

西の下刻に西丸目附徒士頭十五番組水野采女の指図で、西丸徒士目附永井亀次郎、久保田英次郎、西丸小人目附平岡唯八郎、井上又八、使之者志母谷金左衛門、伊丹長次郎、黒鍬之者四人が出張した。それに本多家、遠藤家、平岡家、鵜殿家の出役があつて、先ず三人の人体、衣類、持物、手創の有無を取り調べた。創は誰も負っていない。次に永井、久保田両徒目附に当てた口書を取った。次に死骸の見分をした。酒井家に奉公し

た時の亀蔵の名を以て調書に載せられた創はこうである。「背中左之方一寸程突創一  
 箇所、創口腫上り深さ相知不申、領に切創一箇所、長さ三寸程、深さ二寸程、同  
 所下之方に切創一箇所、長さ一寸五分程、深さ六分程、左耳之脇に切創一箇所、長さ一  
 寸、深さ六分程、右之肩より乳へ掛け一尺程切創一箇所、深さ四寸程、同所脇肩に切創一  
 箇所、長さ二寸、深さ一寸程、咽喉創一箇所、長さ三寸程、都合七箇所」衣類は木綿単物、  
 博多帯、持物は浅葱手拭一筋である。死骸は玉木勝三郎に預けられた。次に呼び出されて  
 いた、亀蔵の口入人神田久右衛門町代地富士屋治三郎、同五人組、亀蔵の下請宿若狭屋亀  
 吉が口書を取られた。次に九郎右衛門等の届を聞き取った辻番人が口書を取られた。

見分の役人は戌の上刻に引き上げた。見分が済んで、鵜殿吉之丞から西丸目附松本助之  
 丞へ、酒井家留守居庄野慈父右衛門から酒井家目附へ、酒井家から用番大久保加賀守忠  
 真へ届けた。

十五日卯の下刻に、水野采女の指図で、庄野へ九郎右衛門等三人を引き渡された。前  
 晩西の刻から、九郎右衛門とりよとを載せるために、酒井家でさし立てた二挺の乗物は、  
 辻番所に来て控えていたのである。九郎右衛門、文吉は本多某に、りよは神戸に預られた。  
 この日西の下刻に町奉行筒井伊賀守政憲が九郎右衛門等三人を呼び出した。酒井家か

らは目附、下目附、足軽小頭に足軽を添えて、乗物に乗った二人と徒歩の文吉とを警固した。三人が筒井政憲の直の取調を受けて下がったのは戌の下刻であった。

十六日には筒井から再度の呼出が来た。酉の下刻に与力仁杉八右衛門の取調を受けて、口書を出した。

この日にりよは酒井亀之進から、三右衛門の未亡人は大沢家から願に依つて暇を遣された。りよが元の主人細川家からは、敵討の祝儀を言つてよこした。

十九日には筒井から三度目の呼出が来た。九郎右衛門等三人は口書下書を読み聞せられて、酉の下刻に引き取つた。

二十三日には筒井から四度目の呼出が来た。口書清書に実印、爪印をさせられた。

二十八日には筒井から五度目の呼出が来た。用番老中水野越前守忠邦の沙汰で、九郎右衛門、りよは「奇特之儀に付構なし」文吉は「仔細無之構なし」と申し渡された。それから筒井の褒詞を受けて酉の下刻に引き取つた。

続いて酒井家の大目附から、町奉行の糺明が済んだから、「平常通心得べし」と、九郎右衛門、りよ、文吉の三人に達せられた。九郎右衛門、りよは天保五年二月に貰つた御判物を大目附に納めた。

閏七月朔日うらうにりよに酒井家の御用召があつた。辰たつの下刻に親戚山本平作、桜井須磨右衛門が麻上下あさがみしもで付き添つて、御用部屋に出た。家老河合小太郎に大目附が陪席して申もうし渡わたをした。

「女性によしやうなれば別して御賞美あり、三右衛門の家名相續被仰附おほせつけらる、宛あて行おこなひ十四人扶ふ持被下置ちくだしおかる、追て相応の者むこようしおほせつけらるべし、婿養子可被仰附なかくおめみえおほせつけらるべし、又近日中奥御目見可被仰附なかくおめみえおほせつけらるべし」と云うのである。

十一日にりよは中奥目見なかおくめみえに出て、「御紋附黒縮緬くろちりめん、紅裏真綿添もみうらまわたそひ、白羽しろは二重ふたへ一重ひとかき」と菓子一折とを賜つた。同じ日に浜町の後室から「縞縮緬一反しま」、故酒井忠質室ただたかしつ専寿院せんじゆいんから「高砂染縮緬帛二たかさご、扇二本、包之内つつみのうち」を賜つた。

九郎右衛門が事に就いては、酒井忠学から家老本多意気揚いぎりへ、「九郎右衛門は何の思おぼし召めしも無これなく之いぜんのとほりめしいだすべし、且行届候段満足褒美可致かつゆきとどきそろだんまんぞくほうびいたすべし、別段之思召べつだんを以て御紋附麻上下被下置あさがみしもくだしおかる」と云う沙汰があつた。本多は九郎右衛門に百石遣つて、用人の上席にした。りよへも本多から「反物代千疋たんものだいせんびき」を贈り、本多の母から「縞縮緬一反まぜさかなひとをり、交着まぜさかなひとをり一折」を贈つた。

文吉は酒井家の目附役所に呼び出されて、元表小使、山本九郎右衛門家来と云う資格で、

「格段骨折奇特に附、小役人格にめしかかへらる被召抱、御宛行金おあておこなひきんよりよう四両二人ふちくだしおかる扶持被下置」と達せられた。それから苗字みょうじを深中ふかなかと名告なのつて、酒井家の下邸すがも巢鴨の山番を勤めた。

この敵討のあつた時、屋代太郎やしろう弘賢ひろかたは七十八歳で、九郎右衛門、りよに賞美の歌を贈つた。

「又もあらし魂祭たままつるてふ折に逢ひて父兄の仇討あたうちしたぐひは」幸さいわいに太田七左衛門が死んでから十二年程立っているので、もうパロヂイを作つて屋代をからか擲さいわい擲うものもなかつた。

# 青空文庫情報

底本：「山椒大夫・高瀬舟」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年5月30日発行

1985（昭和60）年6月10日41刷改版

1990（平成2）年5月30日53刷

入力：砂場清隆

校正：菅野朋子

2000年10月17日公開

2006年5月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 護持院原の敵討

## 森鷗外

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>